

# *Six Degrees of Separation* について

多田久恵

もう終了してしまったが、民放の昼のテレビ番組で「友達の輪」というコーナーがあったと記憶している。ゲストが友人を紹介して次回につなげる、というものであった。第一回の出演者からたどっていくと思いきやかけない人々につながる「友達の輪」ができあがっていたことだろう。「友達の友達は友達」という考えが企画の根底にあったと思われる。

「人類はみなきょうだい」と叫んでいるポスターを目にしたこともある。人類がアダムとイヴから生まれたとするならば、まさしく人類はみな兄弟姉妹、ということになるであろう。兄弟ならば仲がよいか、といえ、そのようなことはなくて（いや仲の良い兄弟はもちろん世の中に沢山いるけれど）カインとアベル兄弟のように、また海彦山彦の話にあるように、人類最古の喧嘩は血を分けた兄弟から生じている、とも言われている。「友達の友達は果たして友達か？」というのが現実の姿なのかもしれない。

ジョン・グエア (John Guare) 作 *Six Degrees of Separation* (1989 年執筆、90 年上演) はニューヨークを舞台に、家族を含めて人と人との関わり方を、滑稽に、辛辣に、そして哀切に描いた作品である。

## 1. 招かれざる客

舞台上には天井からカンディンスキーの絵が吊り下げられゆっくり回っている。片面に幾何学的で暗い絵が、反対の面には奔放で力強い絵が描かれている。回転が止まると幾何学的な絵が見える。寝間着姿のウィーザ (Ouisa=Louisa Kittredge) とフラン (Flan=Flanders Kittredge) が飛び込んできて、昨夜の

出来事を観客に話し出す。ハーヴァード大学に進学した子供たちの友人を名乗る黒人青年が闖入してきたというのである。セントラルパークで強盗に襲われ傷を負い、助けてほしいと飛び込んできた黒人青年ポール（Paul）は、俳優シドニー・ポアティエの息子で、フランとウィーザの子供たちのことをよく知っていると言語。強盗に金も論文も奪われたポールに同情した夫婦は、息子のピンクのシャツをあげ、ポアティエに会いに行くための交通費 50 ドルを与え、一晩泊めることにする。ところが翌朝ポールは男をベッドに連れ込んでいた現場を見つけられ、追い出される。恩を仇で返したポールは実はその前の日にも、同じようにハーヴァードに在学中の子供の親の家を訪れ、金をもらって姿をくらましていたのだ。次には高校時代に一緒だったという子供の父親を訪れ、信頼されて鍵を預かる。さらには、俳優を夢見てユタ州から出てきた若い男女リック（Rick）とエリザベス（Elizabeth）に、自分は金持ちの画商フラン・キトリッジの息子である、と称して、必ず俳優になるように、と励ます。リックから金を借り、誘惑し、自殺に追い込んでしまう。ポールが子供たちの友人であることは真っ赤な嘘であり、シドニー・ポアティエともなんの関係もないことが次第に明らかになるのだが、親たちはなぜこうも簡単にポールに心を許し、鍵を渡し、金を与えてしまうのであろうか？

ポールは傷の手当てをしてもらうとすぐにキトリッジ夫妻の子供たちについて次のように語る。

二人はとても優しいですよ。寮でみんなが集まり、親のことをさんざんこき下ろしていた時も、二人は黙っていました。そして、うちの親は違う、フランとウィーザは違う、キトリッジ家は違うの、うちの家族はやさしいの、って言ってました。強盗がいなくなり、顔をあげると、このフィフス・アベニューのアパートが目に入ったのです。オナシス夫人があちらに住み、バブコックス家はもっと向こうのほう。あなたたちはここに住んでる。だから来たのです。

ニューヨークの高級住宅街に住んでいること、そして、子供たちをハーヴァードに通わせていることは二人の自慢であるようだ。その自慢をくすぐるかのように、ポールはこのあたり（Newport）は富豪達が住む所であることをわざわざ述べ（実のところキトリッジ夫妻の住むアパートは海に面してはおらず、裏通りである（78）のだが）子供たちは親を尊敬している、他の子供たちとは違う、と褒めちぎる。さらに、自分はシドニー・ボアティエの息子で、父が制作する映画『キャッツ』のエキストラに推薦することもできる、と誘って二人の歓心を買う。

キトリッジ夫妻は画廊をもたない画商である。客は、夫に内緒で絵画を購入し、離婚の際に秘密裡に売り飛ばしたい妻たち、また秘かに手放して税金を逃れようとしている人々である。彼らから絵画を買い取り、日本人やアラブ人に高額で売りつけるのが<sup>2</sup>二人の商法である。そのためには常に購入資金が必要で、表向きの生活とは裏腹に、台所は火の車（77）である。今もイギリス人で南アフリカ在住の実業家ジェフリー（Geoffrey）からなんとか200万ドル出資してもらおうと必死に歓待しているところである。

ポールは3人を前にしてボアティエの生い立ちから、苦勞した時代を経て俳優として、また監督として成功する輝かしい経歴を詳しくとうとうと述べ立てる（23）。よくよく考えれば、自叙伝をじっくり読みこんで暗記すれば誰にでもできそうなことではあるが、3人にはポールを疑う様子はない。ポールは実によどみなく語るのである。ジェフリーが南アフリカに住んでいることを聞くと「父が南アフリカの映画を見に連れて行ってくれました」と、1976年のソウェトの蜂起にもふれ、南アフリカ黒人の教育と能力について自分の意見を述べるので、3人は聞き惚れてしまう（mesmerized）のだ（29）。レストランでの外食の代わりにポールの手作りのパスタを食べた3人はその美味しさにびっくりする。とりわけジェフリーは上機嫌である。

ジェフリーは南アフリカの鉱山で黒人たちを働かせて儲けている実業家であ

るのだが（この戯曲の書かれた1989年にはまだアパルトヘイトが続いており撤廃されるのは1994年）彼が「アメリカの黒人はどういう扱いをうけているの？」と問いかけると「困ったことに、僕は自分がアメリカ人である、って思えないんです。スイスで育ちましたから、寮で、ヴィァ・ロージーです」と巧みに答えをはぐらかす。ポアティエはポールの母と離婚して再婚するが父との関係は良好で、明日父に会いに行くのだがその旅費をとられてしまったのです、とも話す。

ポールが3人の心をさらにしっかりつかむのは、盗まれた論文について語る時であろう。彼はJ・D・サリンジャーの『ライ麦畑でつかまえて』（1948年）について話し始める。

・・・ジョン・レノンを射殺したチャプマンの動機は『ライ麦畑でつかまえて』に注目してほしかったからだそうです。・・・レーガン大統領と報道官秘書を狙撃したヒンクリーも「僕を弁護してくれるのなら『ライ麦畑でつかまえて』をまず読んでくれ」と言ったそうです・・・ガールフレンドから借りて読みました。感動しました・・・滑稽な話です。主人公はあらゆることをやってみたい、でも出来ない・・・世間の欺瞞が許せない、でも自分は他人に嘘をついてしまう。みんなに愛されたい、でも、誰も愛せない、一言で言えば若者の姿を実に正確に描いた小説です・・・そもそも主人公は麻痺している、精神的にも知的にも・・・彼は何も行動できない・・・

(31-33)

ポールは主人公ホールデンの麻痺状態について述べ、次にチャーホフやサムエル・ベケットの『ゴドーを待ちながら』にふれ、さらに想像力について解説し、彼の話はどんどん広がっていく。まるで図書館の本を次から次へと読み漁って繋げているようだ。3人はあっけにとられて聞き入るばかりである。気分をよくしたジェフリーは、フランに200万ドル投資すると約束して帰っていく。フ

ランとジェフリーの商談はポールのおかげで成立したのである。

ポールはその前の日にも、同じくハーヴァードに息子を通わせているラーキン (Larkin) とキティ (Kitty) 夫妻のもとを訪れ、キトリッジ夫妻の時と同様に、息子の友達を名乗り、強盗に襲われた、と助けを求める。『キャッツ』のエキストラとして映画にでられますよ、と甘い誘いも口にする。ポアティエの息子と名乗る「とても魅力的」(55) なポールを、二人は自宅に泊める。夜中に侵入した強盗をポールが撃退し、ポールに命を救われた、と思い込んだ二人はポアティエに会いにくための旅費として 25 ドル渡す。あまりに同じ手口なので詐欺にかかったのではないかと疑った二組の夫婦は刑事に告訴するものの、盗まれたものが一つもなく、さらに自分たちのほうから金を渡した、という経緯を知った刑事は、呆れ返って署に戻ってしまう。

次にポールは産婦人科医ファイン (Fine) の家を訪れる。自らナイフで体を傷つけてから、「強盗に襲われた、助けてほしい」と駆け込んだのである。息子のダグ (Doug) とは高校で一緒に、父はシドニー・ポアティエである、と告げる。ユダヤ人であるファインは若い頃、黒人でありながら成功したポアティエに憧れ理想としていたことがあり、ポールにすぐさま好感を持つ。さらに、息子しか知らない、家を手に入れた時のエピソードを告げられ、勇気ある行為と褒められ、ますます信用してしまう。家の鍵をポールに預け緊急手術に出掛ける。息子のダグと連絡をとったファインは、ポールが友達でもなんでもないことを知って騙されたことに気づき、巡査を伴って帰宅するが、ポールに鍵を預けたのは誰だろうファインであることを聞かされた巡査は、これも呆れ返って帰ってしまう。招かれざる客に同じ手口でコロリと騙されている親たちの姿は滑稽で、観客にとっては笑いの対象でしかないのだが、本人たちは真剣で、大真面目に右往左往しているのである。

## 2. 『ライ麦畑でつかまえて』

ポアティエの自伝 *This Life* を読んだ親たちは、ポアティエには4人の娘しかいないことを知り、真剣にポールの素性を調べようと決める。ポールが親たちのことを詳しく知っているのは、誰かがポールに情報提供したからである。子供たちの共通の友人である人物に違いないと見当をつけ、子供たちに犯人捜しの命令をくだす。

ポールに情報を教えたのは、カリフォルニア大学バークレイ校に進学したトレント（Trent）であることが分かる。トレントは偶然ボストンでポールと知り合い、同棲する。セックスの代償としてポールに親たちの情報を与えたのである。ポールの素姓を調べていく過程で明らかになるのは、トレントの存在だけではなく、それぞれの親と子供たちとのぎくしゃくした関係が同時に浮び上ってくる。

ポールのことを「ひどいことをしたけれど、でもー本当にエレガントで、本当にまじめで、本当に思いやりがあるの」（60）と褒める母ウィーザに向かって娘テス（Tess）は

じゃあ、ママ、そのひとを家においとけばよかったんじゃない？ 実の子供みんなと縁を切って、そのご立派な子供にいてもらえばいいのよ  
(61)

と叫ぶ。息子のウディ（Woody）は

僕のピンクのシャツをそいつにやっちゃったの？ 赤の他人に僕のシャツを？ あのシャツはクリスマスにあんたからもらったものだよ。大事にしてたんだ。気にいってたんだ。ウェイトリフティングをしてたから首が太くなって、腕も首も太くなったのを見て、新しい体

に合わせてあんたが買ってくれたんだ。気にいってたんだ。僕の新しい体のためのシャツだったんだ。それをあげちゃったの。信じられない。こんな家嫌いだ。あんたも大っ嫌いだ。(74)

ファイン医師の息子ダグとラーキン夫婦の息子ベン（Ben）たちも続けて叫ぶ。

ダグ： あんたは僕のために何にもしてくれない。

テス： 私の邪魔をするばかりで何もしてくれない。

ベン：僕は最低の人格から伸びてる哀れな延長コードさ。

ウディ：僕のピンクのシャツをあげちゃったんだね？

テス：自分たちがなれなかった人間になれなれって言うのね。

ダグ：クスリの話をしちゃ、僕をみるんだ。(74-75)

愛情に飢えているのか、単なる我儘なのか、大人の無理解に対する怒りなのか、子供たちの口から発せられるのは親への呪詛ばかりである。

『ライ麦畑でつかまえて』でもホールデンの両親は姿を現さない。ニューヨークでの放浪の後、空しい心をかかえて自宅に帰るホールデンは、両親には会わず、妹のフィービとこっそり会う。ホールデンの慰めは、この妹との会話、死んでしまった弟との架空のおしゃべり、そして、ハリウッドに行ってしまった作家の兄のことを考える時である。*Six Degrees of Separation* に出てくる子供たちには、心と心を通わせあえる、人と人との繋がりはどこかにあるのだろうか。父親が疑っているダグのようにクスリに逃げるのであろうか。

生きる方向をみつけれないホールデンは漠然と「西部へいこう」と考えるのだが（そして、それはどうやら実現しないで、どこかの病院にはいつているようなのだが）ウィーザの娘テスの目標はアフガニスタンに行くことである。

ウィーザ：アフガニスタンになんか行っちゃいけません。

フラン：K-2の高さをはかりにお前に金をつぎ込んだ（invest）んじゃ

ないんだぞ。

テス：それだけ？ 私は投資（investment）だったの？<sup>3</sup> (70)

．．．

テス：自分の人生をつぶすわ。結婚して、あなたたちが私に望んでるすべてを棄てるの、あなたたちが傷つくだ一つの道だから。(102)

テスは拒食症でしばらく入院していたことがあるらしい (78)。テスにとって両親は心を寄せる、あるいは慰めてくれる存在ではない。空虚な心を埋めるために、ひたすら親を困らせ傷つけ続ける。

ファイン医師の息子ダグが父親へむける眼差しはさらにきびしい。

ダグ：たまたま僕の名前を口にただけの赤の他人に鍵を渡したの？ ママがなぜ家を出たのか分かるよ、パパを知れば知るほど訳がわからなくなる。ママのことを殴ったんだって？ ママはパパのことを、ろくでなしで酒飲みで安ワインの匂いがしみついているって、安物のドレッシングをかけたサラダと寝ているみたいだって言った。なぜ僕なんかを生んじやったのさ！

ファイン：どんな話にも二つの面があるー

ダグ：パパは馬鹿だ、馬鹿だ！ (65)

何事にも二つの相反する面があるのだ。一面だけで判断してはならない、とファインは論ず。夫と妻の関係も、両方の立場にたって考えてみないと真実は見えてこない。しかし、若いダグに「両面から物事を判断しようとする」能力もまた意思もないようだ。

ファイン医師夫婦の場合だけでなく、ラーキン夫婦の間にもどうやら隙間風が吹いているように見える。キティがポールのことで友人に相談しよう、と提案すると、「それは誰だ？ 誰だ？」とラーキンが喚く。「関係ない！ 関係ない！」とキティが叫ぶ。息子のベンが「父さん、母さん、お願いだから、もうやめて



よ、お願い」と中にはいる (61-62)。二人の喧嘩はこれが初めてではないのだろう。夫婦関係も親子関係も捻じれてしまっているのだ。招かれてもいないポールが訪問し、そして歓迎されるのは、親子の間に信頼感が欠如し、夫婦の間の絆が欠けている、そういう家庭だったのである。

### 3. 永遠の友情

ポールがトレントから情報を得ていたことを知ったウィーザは観客に向かって次のように語る。

この地球上で、人と人を隔てているのはたったの6人だって、どこかに書いてあったわ。「6人の間隔」(six degrees of separation)<sup>4</sup>というわけ。・・・アメリカの大統領ともヴェニス Gondola 漕ぎとも繋がっている、・・・ポールはどうして私たちを見つけたのかしら? ...どんな人との結びつきでも、それは新しい扉を開くこと。他の世界につながること。・・・でも間にはいる6人を正しく見つけるのは難しいことね。(81)

ポールは6人の繋がりの中で正しく見つけられた人物であったのだろうか。ウィーザにとってポールとの出会いは新しい扉を開くことにつながるのだろうか。

ポールは記憶力抜群、読書量も豊富で、知的で洗練されているようである。トレントから金持ち階級の暮らしぶり、しゃべり方、友人家族の情報を手にいれ、それを頭に叩き込む。ちょうど『ピグマリオン』のイライザが「ヒギンズ教授の特訓を受け」(81) レディに仕上がったように、ポールは金持ち階級の息子に変身する。それを僅か3か月で成し遂げるのであるから只者ではない。もしポールの親に財力があつたなら、ハーヴァードでもどこの大学にでも入学

できていたことだろう。詐欺師ではない別の道が開かれていたかもしれない。

ボールはウィーザに語りかける。

想像する力。それが突破口なんだ。想像力はぼくたちの限界を教えてくれる、同時にその限界を超える方法も教えてくれる・・・想像は昼間の声で、それを聞くとはっきりものが見えてくる・・・そうだ、これこそ欲しいものなのだ、と教えてくれる。悪夢の迷路から救い出し、生きる源の夢へと引っぱっていつてくれるんだ。

(62-63)

ボールもきっと『ライ麦畑でつかまえて』のホールデンのように虚ろな心を抱えてさまよっていたことがあったろう。しかし彼は、大学に通わせてもらっているながら、親や周囲の人々に反抗の限りをつくすのではなく、何者かになろうと努力する。彼が理想としたのはシドニー・ポアティエである。ポアティエはボールの言葉を借りると「俳優だったので、実体がなく、脚本に指定された役柄に合わせて自分を変えていった」(30) ののであるが、同じようにボールも、ある時はハーヴァードの学生であるポアティエの息子として、またある時はフラン・キトリッジの息子としてエリザベスやリックと遊ぶ。彼の役柄は親孝行の息子であり、励ましてくれる頼りになる友人である。想像力がカメレオンのようなボールを生み出したのだ。それぞれの役柄を彼は真剣に演じている。セントラルパークで知り合った俳優志望のリックとエリザベスに、金持ち階級の作法としゃべり方を教える。今度はボールがヒギンズ教授を演じる番である。

・・・金持ちを怖がっちゃいけないよ。連中が何を好きか知ってる？  
素敵なジャムの小瓶さ。それだけ。パトロンを見つけなきゃ。それが大事。いつまでもウェイターのアルバイトをしてちゃだめだよ。

(87)

ポールの料理の腕はおそらくウェ이터の仕事についていた時に身につけたのであろう。しかし、ポールはウェ이터に甘んじてはいない。リックたちを励ますポールはおそらく本音で真剣に励ましていたのであろう。真剣だからこそ、リックやエリザベス、そしてウィーザたち親の心を掴んだのである。

ウィーザはポールに、なぜ夜中に男をひきこんだのか、と尋ねる（108）。「幸せだったからセックスしたくなっただ、そういう気分になったことないの？」とポールはくったくなく答える。リックやエリザベスと遊んだ後ポールは幸せな気分でリックとセックスをし、そのことが結局リックを自殺に追い込むことになるのだが、ポールに罪の意識はない。セックスをしている時、ポールはポールとしてのびのびと生きているのだろう。トレントから情報をひきだしたのはポールの性的魅力である。家財道具一切をポールに持ち出されてもトレントは恨むどころか、テスにポールを告訴しないようにと頼む。トレントこそポールの真の友達であった、と言えるのであろうか。いろいろな役を演じてみても、結局のところ男娼として生きていくことがポールの実体である、と言っては言い過ぎであらうか。

裏切られたにもかかわらず、ウィーザは「子供たち以上にやさしくしてくれた」（117）ポールのことが気にかかって仕方がない。フランは「詐欺にひっかったニューヨーカー、という記事にでもしてもらったら」（93）ととりあわず、ウィーザは夫との心のずれを感じ始める。新聞でリックの自殺とエリザベスから告訴されていることを知ったポールが電話をかけてくる。自首を勧めるウィーザに、助けてほしい、将来はフランの仕事を手伝って、ポール・ポアティエ・キトリッジになりたい、と言う。

ポールはすでに美術館に足を運び、ロートレックの絵に感動し、アンディ・ウォーホルの日記を読み、ミケランジェロがシステーナ礼拝堂に描いた壁画についての書物にも目を通しており、ウィーザを驚かす。「いつかシステーナ礼拝堂に連れていってくれる？」（101）とウィーザに甘える。子供たちと心が通わなくなったウィーザにとって、ポールとのこの会話は心なごむものであったらう。

ポールはキトリッジ家を追い出された後、お詫びの印にと、洒落たジャムの小瓶と花束を送り届けていた。それが金持ちのやり方だ、とトレントから教えられたからであるが、その小瓶は前日に訪れたキティとラーキン夫婦からもらった金で購入したものかもしれない。ポールの行動は、資金を他人から借りては次の資金に充てるというフランの商法にどこか似てないだろうか。他人の金を当てにして商売をすすめているのだ。めでたく絵画が売ればよいのだが、あてが外れれば借金ものである。「俺はギャンブラーだ」(118)とうそぶくフランに向かってウィーザは「私たちひどい組み合わせね」(119)とつぶやくのである。

ポールは果たして自首したのであろうか。フランとウィーザは、ポールと会う約束の映画館にいくがポールの姿はない。切符売場の女性が「家族を待っていた黒人を巡査が捕まえ、小突いたり、ののしったりしながら車に押し込んだ」(116)と伝える。それはポールだったのだろうか？いや、ポールはすでに逃げていて、別の黒人だったのかもしれない。しばらくしてウィーザは新聞に、黒人が監獄に輸送される前に首つり自殺をした、という記事を見つける。シャツを首に巻いて自殺したのだ。それはポールだったのだろうか？ピンクのシャツだったのだろうか。燃えるようなピンクの(119)。それとも別の黒人だったのだろうか？ポールという名前も本当かどうか分からないのだから、そして家族でもないウィーザたちに真相を知るすべはない。

劇は次のように終わる。絵画のオークションに出かけるフランの後を追って

(ウィーザは歩き始める。顔をあげる。ピンクのシャツを着たポールが現れる)

ポール：カンディンスキーの絵。表と裏に絵が描かれている。

(彼は一瞬輝いて立ち去る。)

ウィーザは考える。微笑む。

カンディンスキーの絵が回転をとめて劇が始まり、再び回り始めたところで劇が終わる。あらゆる事柄には両面がある。論理的な面と感情的な面、秩序と混乱、規律と自由。一つの考えだけで世界を理解することはできない、という作者のメッセージがカンディンスキーの絵にこめられているのであろうか。

ポールと名乗る人物は果たして何者だったのだろうか。想像力がポールの演技をひきだし、ポールを創り出したのである。しかし、その想像力は同時に虚像のポールを生み出した力でもあったのである。ポールは、ポールを必要としているところに現れる。心を通わせられる友達を必要としているところにポールは現れる。ポールが求めていたのが「永遠の友情」(everlasting friendship) (99) だったからだ。ポールという存在が消えることは永遠にないであろう。しかし、果たして「永遠の友情」など存在するのであろうか。

ウィーザはオークションに出かけるフランの後を追ってエレベーターへと向かう。ポールと知り合うことでウィーザには新しい世界が開かれたのであろうか。それとも、「ギャンブラー」と豪語するフランとの共同生活をこれからも続けるのであろうか。ウィーザの微笑が何を意味するのか、作者は明らかにしていない。表と裏に異なる絵が描かれているカンディンスキーの絵を示すことが作者の伝えたい事なのかもしれない。物事に対する解釈は一つとは限らない。「永遠の友情」は存在するのか？ 友達に巡り会うことで新しい世界への扉が開かれることがあるのか？ 人と人との関わり合いについて作者は観客に問題を投げかけている。

作者ジョン・グェア は1938年ニューヨークのカトリック教の家庭に生まれる。ジョージタウン大学を経てイエール大学の演劇科で学ぶ。昼間は動物園の飼育係として、夜はバーでピアノをひき、有名になることを目指す男の夢と挫折を描く *The House of Blue Leaves* (1971) が、ニューヨーク劇評家賞とオービー賞を受賞し注目される。本作 *Six Degrees of Separation* (1989) も同じく

ニューヨーク劇評家賞とオーギー賞を受賞、ピューリッツァー賞の最終選考にも残り、グェアの代表作となる。リンカーンセンターでの初演の後、ブロードウェイやロンドンで上演され、ローレンス・オリヴィエ賞の最優秀作品賞を受賞する。1993年にはグェアの脚本により映画化され、ウィル・スミスがポールを演じている。この映画は1995年に『私に近い6人の他人』という題名で日本でも公開された。グェアのその後の作品としては、*Chaucer in Rome* (2001), *A Free Man of Color* (2010), *Nantucket Sleigh* (2019) などがある。*Two Gentlemen of Verona* のミュージカル版 (1971) や、映画 *Atlantic City* (1980) の脚本を手掛けるなど多方面で活躍を続けている。

#### 注

- 1 テキストは John Guare : *Six Degrees of Separation* (Vintage, 1994)
- 2 フラン達は、購入した絵画を次に日本人やアラブ人に高値で買わせようと目論んでいる。1986年から91年までの間日本はバブル景気に浮き立っており、海外の不動産や絵画を買い漁っていた。この戯曲が発表された2年前の1987年には、安田生命保険会社(現損保ジャパン日本興亜)がゴッホの「ひまわり」を約58億円で購入し、いわゆる「アートバブル」の先鞭をつけたのである。絵画を売りつけるいいカモとして日本人が言及される場面は4箇所(39,40,52,95)もあり、格好な揶揄の対象として描かれている。
- 3 テスはなぜ、飛び出していく目的地としてアフガニスタンを選んだのであろうか。フランの心配するK-2は隣国パキスタンと中国の国境に聳える高山である。アフガニスタンは第二次大戦後、欧米各国の利害もからみ紛争のたえない地域である。1979年から89年までソヴィエト軍が支配し、ソヴィエト軍が撤退した後は、タリバンやアルカイダが台頭、内戦が全土におよび、2019年の現在も貧困と戦火のなかにある国である。テスは親を心配させる為に最も政情不安な国を選んだのである。アフガニスタン、と聞いてK-2が聳えるパキスタンと取り違えるフランの反応に、父と娘の認識のずれが滑稽に表されている。
- 4 six degrees of separation は「6人の間隔」あるいは「6次理論」と訳される考え方である。井上ひさしは日本ペンクラブ会長に再選された時(2005年)、次のように「6次理論」を引き合いに出して言論の自由を訴えている。「みなさん6次理論をご存じでしょう。自分を起点に6人を間に介すると世界60億の人と繋がる、ひとりひとりが30人くらい友達がいるとすると、これを6回たどっていくと60億全部に届いてしまうという理論がネイチャー誌か何かにでていまして・・・言論の自由と、戦争をして命や財産がなくなるとい

うのに、ひとにぎりの人が戦争を公共事業のようにしてやっていくということはおかしいよということを、私たちひとりひとりが言えば、それが6回伝わると世界中に伝わってしまう。そういう意味で私たちも頑張りますが、皆さんもペンクラブの会員という立場から、できるだけ言論の自由ということを、その場その場でおっしゃっていただければ、それを誰かがあと4回くらい繰り返すと世界中に伝わるという理論を紹介して、私の2年間の抱負にかえたいと思います。」(笹沢信『ひさし伝』、新潮社、2012年、410)